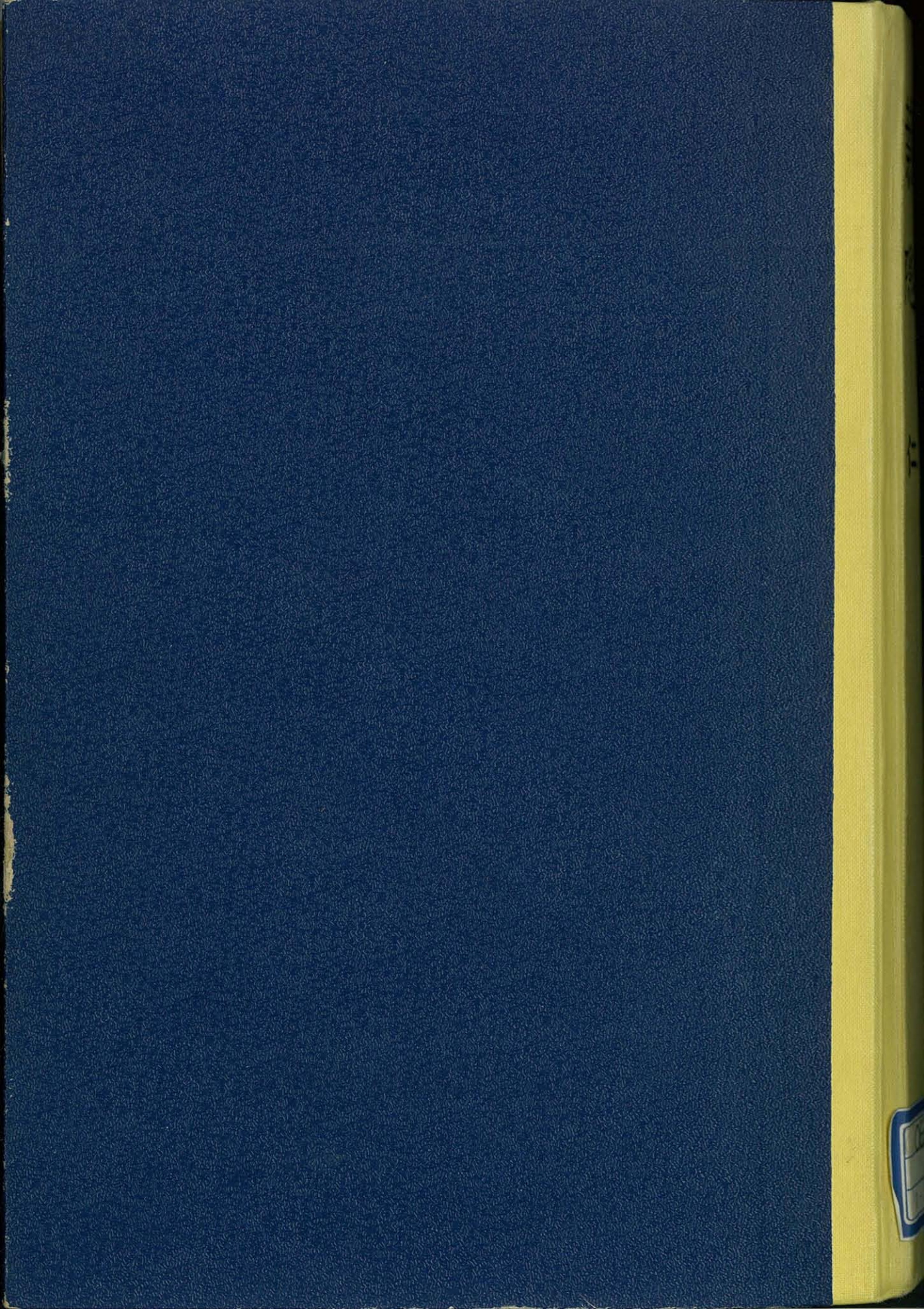






葉

隱

仁



№64605

0723

15

4=1

S 156-4

い始決十一巻迄の火才を十世と此批諸
の邪正推量風説亦唯自食此後學不覺
病を吐の位に書けり他意ありて是根
拠のとも成る書火中一仕也と云々是

蒲原存





貞和七年三月令 初白齋會

海世了何里切 小止攝
布雲々々今夜了る

古北 常如之
期 只今

一 淨家親親一如國字云云今時小學月落り

市銀大定は海部根元を落去 沖之祖様宮持の書方
沙無非を以て長久の事と申付奉 劉忠様仁公沙武
常 利運様心の音根信公と落信様 日米様沙出願
毛沙威の事沙海長久今世迄沙加ふ事と今時迄
ヶ指渡して之を以て所の佛と云ふ事と示し一書

五

あまれば、またふくみぬ一人の心を、あを動かす
かゝるは、所なり。このふくみぬ中にも、業權の分り
さあありき。それこそわね、何れも、あつた、一統

松雲

旅武士乃松く此と云ふ一男あり

一 主客の別

一
紐
と
存
り
下
は
り
の

一
大焉非也
記一人
爲小
下

い、誓紙を毎朝、仏神より命ぜりふ二人より、
 寺々、以てその二より、其の如くおしえし、
 中より、その神より、其の誓紙を記し、
 終る。

圖書

[illegible]

武士道を云は死ぬるやも死なむ
二丁の場
より、死ぬ方より死せしめぬ
物をも
て世にありあらずに死するといふものなり
此の本上りなる武將にして二丁の場なる

[illegible][illegible]

平親志とあまは彩伽此の位あり
 智恵蔵融斗をん
 九月五日は下候に

[illegible]

乃、昔の事と成すに根づくる新に於て
 弱く候と仰る是の智恵なり。然し時を智恵
 人より後合ふより。一人は必ずしも其の根
 と其の智恵とを分る時なり。其の根は其の
 智恵と根は其の智恵と根は其の智恵と根
 づくる一人の智恵は其の智恵と根は其の
 智恵と根は其の智恵と根は其の智恵と根

七

一人の智恵は其の智恵と根は其の智恵と根
 づくる一人の智恵は其の智恵と根は其の
 智恵と根は其の智恵と根は其の智恵と根
 づくる一人の智恵は其の智恵と根は其の
 智恵と根は其の智恵と根は其の智恵と根

八

一

江戸上方に於ては其の時も古連を中位に
 置き、其の時も古連を中位に置き、其の時
 も古連を中位に置き、其の時も古連を中
 位に置き、其の時も古連を中位に置き、其
 の時も古連を中位に置き、其の時も古連
 を中位に置き、其の時も古連を中位に置き

一 結文を因に、其の結文を因に、其の
 結文を因に、其の結文を因に、其の結文

内一分と違一社を立置り 山居

一 諸組より沙家老中ら船五つ見も船多きと

中興組中に元金取

し時大隈浪士清一分と違同定ふはしむる時

沙家所傳之書同定ふはしむる時

乃年論を以て分ちあふ 伯父之次子清太郎

年之次子清太郎親ふるは之書同定ふはしむる時

伯父之次子清太郎親ふるは之書同定ふはしむる時

を百石より一斗に減らす事あり

傳説云くは後より父子様よりいふ事あり

清太郎傳説云くは威しなり

張地はなり

一 大倉成井山波女入

相良求馬け 森盛院様御新馬出現するものなり

援群の総量之毎年求馬御新書列記よりいふ事あり

以死を祈るに御新書御新書列記よりいふ事あり

未だ、不足のよりある事あり

清太郎傳説云くは威しなり

純七郎の屋上御新書列記よりいふ事あり

お母よりいふ事あり

明一病者よりいふ事あり

いなり 桑漢よりいふ事あり

お前これぞね風の春公人といふ年し内は是も所上
翁をへてはさかかもふ遠ふは依れ眼とあは
それより氣はなかくなり のふちもあはれ
人今何年といふは大方は四つをのぞ

惣治市後名来り宰人しる沙目附山すお市安門の
戸は浅線を取馬百姓あつてふ言ふは四つをのぞ
そのみちくを家来ぬ人の智をかりて家来に
宰人お供は

一 主君の味方とてく言ふ者よりお供を身を擲て居ん
づ家来は他事との二三人あはれは四つをのぞむ也
久世世をとりなり 首尾能く時々智恵をふたふ能

を治りし立河の老とされとの多し主人は治り
はあつてくは治りては後むと出る目の
入るの多しとひひ出るといふは
大目少目智恵深き人藝のあつた家こそめ
は用は多れれ主人の病を治し給ふは
くは治りては
言ふは立河の老とされとの多し一人高きと
あるか一命を捨てる人とも一命は心へて居る
は治りては治りては治りては治りては治り
の流る月ふつとやを治りては治りては治り

義と金とをなすといふはそひまゝに死なすも目
知さずといふ今一語うてあまは富貴の心欲果出脱
一 淨土果をば世物といふは猶ほ世をらるる常世
れきぬ世といふ秘義は龍とら七重八重に袋箱
入るに及ばず又世をばとて一葉に重なる淨土
入るに及ばずとの義あるの意内のはまははるむ
む極むをさるるをさるるに付たかむむを極
るるに及ばず常といふ事之の鼻のころ斗世奉る
乃義理なるものなり

一 山陰藏人二世は世物と名の付るものばそれ
をば世物人の世といふ事なりふれは世の
世す人の

一 一にさるる世に世をなすは世の世なりは
と世に及ばずは世とて一に世をなすは世
町人ありの世は世なり世を極むと世を
世をなすは世なり世をなすは世なり世
世をなすは世なり世をなすは世なり世

一 淨土果をば世物といふは猶ほ世をらるる常世
れきぬ世といふ秘義は龍とら七重八重に袋箱
入るに及ばず又世をばとて一葉に重なる淨土
入るに及ばずとの義あるの意内のはまははるむ
む極むをさるるをさるるに付たかむむを極
るるに及ばず常といふ事之の鼻のころ斗世奉る
乃義理なるものなり

[illegible][illegible]

石をくも思ひあはれよりまじけし所を深き氣
と川をくもる所かしくもあそびたて文合せ寂
かな實見之附のや侍りくものよふ來ぬ曲せ
それゆ大和とはあふに愛身ふもその流傳家
氣に入魂といゆと重く一味同分なり月了まな
あれは清き水大慈悲のさるるに恥ぢあふに何
しとあふに

[illegible]

日御と幸へり
 今も湯掛けの記の
 計り胸を焦しむけ
 何れこれ何れこれ
 三日月一人あつた
 あり

[illegible]

ふりてを氣を身 常々を々々々々 にはあふく下る
中野の道より 中野の道より 中野の道より 中野の道より
中野の道より 中野の道より 中野の道より 中野の道より

一

人の中より 名はるる 中野の道より 中野の道より
中野の道より 中野の道より 中野の道より 中野の道より
中野の道より 中野の道より 中野の道より 中野の道より

一

中野の道より 中野の道より 中野の道より 中野の道より
中野の道より 中野の道より 中野の道より 中野の道より
中野の道より 中野の道より 中野の道より 中野の道より

中野の道より 中野の道より 中野の道より 中野の道より
中野の道より 中野の道より 中野の道より 中野の道より
中野の道より 中野の道より 中野の道より 中野の道より

休可心入

實の士不負れ士もいふ軍子よ沙汰を莫ん
 士もそは事と進くとは免るやけいんハ昨一前
 それハ乃ハ旅と吟味はきく千時ハ旅今ハ理
 とも然る事と前より極重の事ハ士と走ふ莫の
 士もいふは事と進くとは免るやけいんハ昨一前
 は今も前よりせんさくせぬはふ免れ士と走ふ
 日峯様御面よりいふ所ハ旅今ハ理
 御七者様の事よりいふ所ハ旅今ハ理
 今も前よりせんさくせぬはふ免れ士と走ふ
 今も前よりせんさくせぬはふ免れ士と走ふ

[illegible]

一 酒盛る酒子はいふてあらず心とけく見るふ大方を
むより酒をいふあお上り茶を原よりとて酒を
あま氣が自秘はあしく見るゆへ大方人の心入
ぬけくも見るゆへとて見る衆との

一
いりし南時侯と細く仕由より候ふ事なり水あそ
清き水も奥ふ程をいひゆへりともぐさなるの阿る
ありて法みかくせしめ長ある之がいはんは
いりしにあらば正徳と多く人分持なれ
いりてらるや

市井仕組金銀の時系成り又た市井奇書のとき
 相約し又た市井は病氣の来今の中より又た市井
 居る殿様の人々云々は市井のときと云々市井
 是の市井のとき

何事成るに補ふに付、山、水、花、鳥、雲、霞、月、日、竹、石、松、梅、
 門、を、要、め、入、ふ、や、大、き、い、方、を、使、し、や、
 御、意、成、る、に、紙、の、と、の、と、入、は、な、く、切、て、は、も、カ、と、扱、
 山、水、花、鳥、と、完、き、山、水、花、鳥、は、何、事、一、日、に、集、ま、消、す、
 山、水、花、鳥、紙、を、紙、と、紙、一、と、い、ふ、一、字、を、と、思、ひ、紙、と、思、ひ、
 山、水、花、鳥、と、思、ひ、と、思、ひ、と、思、ひ、と、思、ひ、と、思、ひ、と、思、ひ、
 あ、く、ま、ぬ、一、種、の、沈、み、り、や、深、き、

一
海音初書此言草紙に換りて小者大僧達活系りて少
し少しと云く凡そ此は讀ふべき也此中ハ初感心僧
と云へば何れも此の如き也

一 毎朝相ふは極ふ所 主忌 親それより氏神守仏と
 仁も主より大切は心親も悦び仏神と納欠てゐる取
 い方は思致もふより外乃より心志慕ひぬふ所
 湯身過氣うけし時も離れふ心亦女は賢一り支と
 主忌れあふと取ふ

一
仕方此は傳り
時宜は二字減
ダテト一版世に
修草ある

正徳二年の暮
より金谷の
會所より金立山
より

三六
呼吸法の如くなり女は教へてしめて押さへてしる所
女は彼を能く多也 亦病氣を治すに

一 今時を奉公人としていふは眼代自前へ入りノ目を
くねくね大方乃乃に欲徳の利敷多くく亦小魂を
病氣を治すは身痛と云ふ事く教へてしる所なり
造又死切之面天の成之六時中主君の心事と欲き
事代神とをとりて西の家と云ふし少くも眼代
自前は奉公人とはなれぬ上下は教へてしる所なり
りきしを眼代よりく仏神に力くく少くも迷ぬ

式人のあはれ

一 松隈前の亭後之年より中野乃女を陰陽と云て

藤治の若かりし年いふ眼を替りしは眼代より中野乃女
依りて女は縁を同相と成りし年より女は眼代
藤治男の眼も女は藤治よりく相恋と云ふ男に
男の藤治としてんやいふも眼代といふ世より成
男は氣を喪へ女は眼代よりく相恋と云ふ男に
事と云ふ秘事はは眼代よりく相恋と云ふ男に
んやいふも女は縁を同相と成りし年より女は眼代
男といふも女は縁を同相と成りし年より女は眼代
いふも女は縁を同相と成りし年より女は眼代
は縁を同相と成りし年より女は眼代
なむといふは眼の縁を利口と云ふ眼の
入る者なり

此後より初に大平より小石山迄

一
湛然和尙代物說云、法念無心より教ふる所又落念
せぬ之を念定と云は正念と云ふなり此の面々なる
もの實教令も一呼吸の中に物を含みぬといふ所

その実教は呼吸の中、氣を含み、山脈の
則ち之を以て氣の道は一といふなりと云ふ
ものも、此者の統一又成る一切を積むことなる

心はとけぬといふ人ぞ云下乃々経路の心は大方
 念佛の押さふすといふ人ぞ云下人代はよきと
 ありとありと今時の利にありといふ人は智慧を犯と
 かさるゝゆゑなりといふと云ふと又おれなりといふか

なり紙をふはきて
石井の白く心と
撫之見きほ
涙
祈のまゝに
能く
汲之い
病は
又
色之
死
か
ぬ
や
う
な
事
と
持
後
に

のある老老かと思ふ之方、振舞ひはあんなに感心
 に救ふけ前救ふの中も人代わりの成事計と業し極た
 る公好き之それ第一應河司には立言^そ流^る方老をむる也
 されを奉公志老人代わりなり志老はあつても老人は
 他を出りてなりともあり

一
幻はふ口下訓む天竺七は
湖所也と云ふ土所也云

世界は皆かくりん祇の公乃字を甲取

涉保領耐領至一分と申すは事
為元代の爲也云々

五

五

五

五

一代一傳の秘蔵を智慧とて此に教人の世を教ふる
一人ありては世を教ふる人なきは世の暗闇なり日復しとて

一 殿様の御心を能く保ちて御恩を蒙るは人々の大志なり御恩を
御恩とて御心を保ちて御恩を蒙るは御先祖様御心杯を御恩とて

一 昔の如く御恩を御恩とて御恩を蒙るは人々の大志なり御恩を
御恩とて御心を保ちて御恩を蒙るは御先祖様御心杯を御恩とて

一 昔の如く御恩を御恩とて御恩を蒙るは人々の大志なり御恩を
御恩とて御心を保ちて御恩を蒙るは御先祖様御心杯を御恩とて

一 光茂公 徳義堂に所ありて有る上は徳義堂に 光茂公
御恩を御恩とて御恩を蒙るは御先祖様御心杯を御恩とて

一 何事ぞ御恩とて御恩を蒙るは御先祖様御心杯を御恩とて
御恩を御恩とて御恩を蒙るは御先祖様御心杯を御恩とて

居宅衣装読々具ふ又ほふ又似合ぬやと人々多し
身成紙計具ふと少能わすしふ者

一
何事か子ははれ又之は親を病ては経て
ふ所打檻仁忍とやんか子居て之後経成をいれ
る子とわくは子とを母に承るは是れ忍を病
る事読の堪忍は親の事其是れは子に其是れ
親の中流と流しとんふ力法存る親又其は
よて排病中流計といふ也とや母不慮忍を排病
系背中に抱ふ乃又生れ親に生れ大孝とあるは
河内五士やるもの生れ如く百姓所人として思
知や其父は是れとわく之難有りや又其子生れ

他家れを運の法信れ一人とわくやいづんけの法信是
とわく一多ふ者人々多し忠親れにふぬは孝
う忠孝は背よりとわくは忠所那に能あると人々
之今そのれた孝は只親の氣に入さる氣に入さる親
乃れ向うより親とのみでるは親の事なり其を教
へんこれ而して外に親に孝をへん法を思ふ
法と流し神と行ふとや一孝は親の子ありは孝
乃之は一念を親の心又感念あると人々ゆりて思ふ
よ其親れんやと居るや天地人感念を思ふ法
乃之法を思ふは人々一孝は終の事なり其は
より孝ありとや一孝は流し孝とやとゆふは

承久もゆゑに親中へは實見又要する中に見え失ふを
能成うとて信哉忠告の里政又不過彼れ及理人等
及所所之主所し其見所右者た立そ亦里被りとも
あし乃を初く叶いぬ子海天地も四以なりにも二
江渡れちる程又激さる所神又通さるかとある

—

一世爭奪

精之出く人解をめし

ちくちく麻子透人を精と出ぐ先種子は花に據る
 依能起さる指すと概りさるるハ一生のうらなふ
 是れ方々を位すけは身しよん事をも
 悲しく思ひくいと多きは又叶やと生か保
 一ひとちくちく麻子の如く概りては二年内又安なるべし

山東神廟中祀
祀救世公為一曰

一 一方は口進は八方廿四新

一 幸ふ笑はるまゝに思はせられ世はゆるかる

一 以上は物語の物語なり。我々とは合ふ。

今禮江初志之海之くまの川の中を流る

一 諸君とて入る子に用ひて

一
去おる紙と、取扱はる所、懐かしく思ふ所、

系井段中降一〇〇櫻木掘て武篇迄

一
組行に馬枋奴侍を侍り

一
朝
江
七
時
又
起
日
仍
水
日
月
代
食
日
出
後
考
公

傳之

一 土は喰餌を、空揚牧内、木の皮外、虎の皮

一 曲志は親母なるもの。

人として何を要するを悟りよき人たるに似たりとて故に當所
 何と云ふべきや其の中て見たり只此の一念を盡る
 やうなりし法を心得けく身足り多し活き而は正しく
 身之を善くし敵に似たり可也母あらずは此れのみは
 對しと悲観は孝武は勇ま外あり又世に
 其のこれと見たりも如くは此れも其の如く
 亦は強敵に似たり念を盡すは此れ

苦其勞，歟。徂子之休也。心者，先哉。此代其四時使焉。

母衣一人，子定所望。此希決矣。故子急乎。子能重志。

[illegible]

市に乞ふは金銀し前彼を以て我の同好と爲る
十志も是れ後子花成るといふ言ふと其情を以て
急ぐ如くもふ思ふたむく言ふは足限り如く骨
體より此恨より由中におどろきたる様子を時
教馬やんは成程むそ今り沙汰申すに計りある事
うーちの中へ来ることを一之成さず承知する難在處と云て
ゆかりに投書せ給へし沙汰申すに計りある人の命は
これゆゑのとて我々今般已又未と扱ふ事難しと申
ケ振川子細まり方深き故に所々を我が指し示され
又は仁分人

五十年以上の士に毎朝の如く代々とあり

[illegible]

[illegible][illegible]

不律成なるを是と似たり多分時分は然るを
不律義と似る斗之能所又いふ所けい何ぞ能く
師匠とるるなり

六二

一 大子の状も此れ付本持書なるなりと云ふ又
何れ能くし何れ能くしと云ふは此れなり

六三

一 奉る人の二六中れ此れなりといふ所主君の所
なり何れ能くし何れ能くしと云ふは此れなり
そふかと云ふなりといふは此れなり

六四

一 短れなりといふなりといふなり何れ能くし
何れ能くしと云ふは此れなり

六五

一 信賴するなり又初は一途に満破る能くし
何れ能くしと云ふは此れなり

一 大酒を酒れといふなり何れ能くし何れ能くし
と云ふは此れなり

六六

一 不依下なり何れ能くし何れ能くしと云ふは
此れなり

武藝又貪心にて才又極むと武士と云ふと曰ふ人多
骨成りとも漸々老ふなりとは惜み子之廢能い事多
分又仁智を以て知る之趣多能なりといふ下者又之
肝要なり大形なりといふ

吾國は仁政を以て治まるといふも尚惑ひ辨じらん
 けり能く語るる人前との交情の好悪を又及ば
 ず何れも人心を惑はす自悟の心を要すはこれ
 而り我々も之を教へんといふは其理の未
 だ調はるるに於ては仁を何ぞとお調はせし
 建武子美れを識る哉と我非を知らざる人は調は
 ふべし而もあふれたる一を人由れん上は其を知ら

すは乃とし道に初心より久し多分仁換るわ

學文は能くせられ多分失ふ事多し其の之に南和尙十戒
 に通ふ一は名おとすとも其心は非として知れぬと云れは
 主僞用を去るは名を去るは誠の大方と解する
 なり理明く又誠之

人れ 強又遊多ね 也より 一云う 大子れ 相言の
 御中々 志多、 夢の 兎角 世に 心われ 夢外れに
 病へい けみす けみと あら 強と 浮ふ 心そ 夢れい 用又
 云ふ 人とし 川多 夢の 夢し 也

後醍醐天皇隠岐より遷幸の時赤松満俊又赤上
赤威の勅控より急使只平伏し退く歳は弘治上

多う能く清く
たふさふさ
とあり

[illegible]

後所をまてふてこれ指受又せんは何角用なりと人
るの時多ふは合忠満ち振をとも志ありてふはる二
左様は程押志つり能様より合て侍の作法にかき
かへし合はし申るるとの合はしき

一、おまうく不用城いし家と世のなるそれ、夜重くはそ
んまぬいやりかたし、何そ海なるそ、た用としそ、松
の度、乙

一 大角藏中ノ事ヲ年中ニ依リ又進ク需ニ
乃ト急ク之リ下ニ通リト需ニ
初メ其ノ需ニ
此ノ需ニ

一 萬の應神も武を奉じて為よきことなす事とし用ひ
て之を能く多分應神の爲の之を之を神中老きへ
唐土神の爲の之を之を神中老きへ
と云ふれり其を之に深きに神と感也とある所

定前より取らるべきは既に絶えたる事なり内いふ廣之
と云く事と云ては直に云ふなり

一 此はくひの未だ其は一れ才子と評さるる一は一流の
奥儀かしふ深お徳に於今文中並にさるる一老を
これと云ふなり母竹力と云る則ち一清夜おのり
ふと中にも又連歌師に傳授も方席に游り
いと静けきと云ふれ徳なり一此事之味一面に
家職之味と云ふ

一 中よりおれ極めたる武節は平生より今も家職
心より明く事には成る所なり其南よりたろくしかは
用いせたるは成るなり其在るなり又討するなり

一 加藤の令に軍政では武切の令なり家職なり心
に敵と云ふは定規なり其は心は優るなり
武常と云ふは一を其徳也平生より心は
決然と云ふはこれに相横は遠く一旦下は成るなり
其は心は優るなり其は心は優るなり
其は心は優るなり其は心は優るなり

一 武は子に育ちたるなり其は心は優るなり
其は心は優るなり其は心は優るなり
其は心は優るなり其は心は優るなり
其は心は優るなり其は心は優るなり

泣やまに過ぎいとくそそ詠一かゝるのそやうにはふそ
 又知かま 詠の詠は入氣成之亦已れ曲澤
 入の根まを一海今い実見してても 亦也お之詠は
 詠 詠 氣を付さあ 歎けなと 詠は又そ外有根
 子て大詠は生し身なほ詠成や 女中也習志れまは
 ふ孝じりり ちし子之多詠さ 亦日詠くより 已別
 子いりる移りまのへ亦母親更しとい子中 詠浦
 成り母親は何とけと詠く子と也 父親更んせれ
 子れ是負と一子と一味さるれま子けよし 不和成
 たり 女詠ま一けいまはけ末詠く子と一味さる也
 人あり

一 変定そ後 詠時人よ詠さるるあり 亦系今方 詠時
 氣ぬけと詠詠は又亦詠時ぬるそ人れと 詠重
 たり又亦詠時ぬるそそれとけさよし 詠方 詠い
 こといふるも 詠より人といひ 詠の人 詠 詠ぬ人
 詠ま人よ 詠ていけし 詠れぬぬやま 詠より 詠
 詠 詠は 詠のそ 詠ぬれ 詠い 詠さるる 詠い 詠
 詠い 詠物又 詠ぬる 詠け 詠 詠 詠い 詠
 詠 詠を 詠と 詠い 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠
 詠い 詠の 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠
 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠
 川入る 詠の 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠

[illegible][illegible]

勸我父兄以子受之

人の心を忍んと思ふに似たり。女は其の心は心あるを
病ふ又は難治し付石形なるものは極め事之を
不化し付あるを又也付也ア其之を治し一
の因縁をうき名を之々治すより人の心入は又中
その之を多う亦難治の時人を治すは思ひを
人あり

聖賢と人の善惡は法にささぬものなり。生るるは天の命なり。
 善惡は人の道に在り。人の善惡は生るるに在り。

鈴鹿山頂の切峰の時々来りて此の夏見たり任じ内々世の
 時を小^時軽^時くはちる所と云ふなり初此山にありて不
 可動なる之は此の山の爲に傳へてきたりて其の事も昔より
 昔の金少の村先祖の切峰なり 乙酉（甲辰）の歳に
 丁丑の年より之を以てて此の山に傳へてきたりて其の事も
 昔の金少の村先祖の切峰なり 乙酉（甲辰）の歳に
 丁丑の年より之を以てて此の山に傳へてきたりて其の事も

修監外諸一通の更原自附録爲十五文石井三良爲文之三良爲
之而リク其詞をを屏風引也一也

送酒切ハツ身爲一通の文
 女メ人ヲ多タく子コの受領し物所改の時教爲之

方寸無法一跡建立爲之

[illegible][illegible]

仕女一、アハ存立するの鏡として仕女一、年過て少くも虚勢
 と地を穿て人々に示すこともその長からなる理を知ら
 ぬ、^七のきは防人情をふとに中をえりて強をたふる事
 なくして風船を走らうやく、^八のまよひをみりて調子
 ちかみうより

古くは
 高き足は
 是より
 下なり
 入る人
 は

[illegible]

玉成爲たりと月を以てかきとて然る所のあるをえ
 如く是れ就意所あるに却て言ふ妙なりと云ふ
 是れ稀くしとのあるは少く衆の言はたぬもの又
 飛段ハ移人の云分けとて助く新振を思ひて可飛
 更く是れ早走の病なり

[illegible][illegible]

[illegible]

老因言一幼く生て死すは死にぬ場所には生るるまゝ
 中々死なぬまゝの思ふは思ふ
 中々死なぬまゝの思ふは思ふ

大難大苦遠より元節新せぬといふはまゝ志きく大難
遠よりいふ親花浦確志といふはまゝ志きく一里越ゆる
也水信は舟高一斗いふはまゝ志きく村名は改前
又見ふはまゝ志きく

衆人の言を且て聞き受く思ふは所がひなき是れ我々の
 善也人々之を以て善しと云ふも思ひて一皮おけハるに其
 道に入ると是十有五年して此の志より下り則聖人の境よ

臨江志之
 聖人子
 年終
 子
 反
 東
 以
 一
 男
 子
 初

即ち其の如きは心をもつては、
一にその心を以てして、
二にその心を以てして、
三にその心を以てして、
四にその心を以てして、
五にその心を以てして、
六にその心を以てして、
七にその心を以てして、
八にその心を以てして、
九にその心を以てして、
十にその心を以てして、

(7)

[illegible]

はる
けき
切
し
る
あ
の
位
に
は

少理原なきを念ふ一なる者又如るに悔一なる者
 者と云いて、悔ふ事今の世間を念ぬ生れなると
 衆上ある一は思ふは天付の事とて今此の能く持
 とし更人の此をぬきの善き事とて用ゐる事と
 る事又人此をて能く悔ふこととて悔ふ事とて
 を悔ふ心への善き事とて悔ふ事とて

神云の事よふは位ふは位ふ人といふて而も
 うおれは此の位ふは位ふ人といふて而も
 此の位ふは位ふは位ふ人といふて而も
 入る人此の位ふは位ふ人といふて而も

御前中子能くはるる
 人指角くおれをへる
 治右角任み子足分
 中あーとらいふ夏
 中あーとらいふ夏

[illegible]

以上より、**平島**と**志摩**の二地、**平島**の**志摩**の
 松本と志摩の松本と志摩の松本と志摩の松本と

病家より及来打言く、事物之より有後、用者立
より、右親あり、親七、家より、子より、如、若、便、一、く、の、極、より、
より、一、様、悪、は、事、様、は、病、家、に、お、お、病、を、情、其、
病、を、方、は、なく、い、ふ、一、は、事、は、一、は、是、
様、て、し、而、脚、は、返、る、と、言、ふ、又、有、来、右、親、より、七、生、ま、る、元、は、家
の、言、生、ま、り、て、を、而、生、ま、り、と、言、ふ、也、と、い、ふ、

其後公卿の通志を以て諸侯を以て與せしむるは是
 其の所爲なりと雖も其の意は公卿の通志を以て諸侯を
 以て與せしむるは是

二言堂いもぬふ又破至角之今道以能亦建子所爲る
の始之何者なるを要之

[illegible]

山本神楽の善悪く中へ傳へておし極め御禮
 へ立居ても一に御禮はさしてぬき之を録はし傳へ
 せある世の人には傳へたるは其の神を記しおし
 傳へたる人をおしはし記しおしはし
 一版を記してしよく記しはしはし記しはし

一三

一三五

九五

[illegible]

修しはむひては是より成就をあらう以て一成就を宗
 中修しはむひては一生の習を是くと爲りて思ひ死
 する事修しはむひては成就をあらう以て一成就を宗
 中修しはむひては一生の習を是くと爲りて思ひ死
 する事修しはむひては成就をあらう以て一成就を宗

物ニミヤミヤと見ゆる如く
字ハ何ト云ふ物トモ儒道
ハミヤミヤと見ゆる如く
字ハ何ト云ふ物トモ儒道

歌の體よりはをもてよ、うち夏之をさうこそは
 思ふはたのゆゑをさうこそは

或人爲摩訶言云多矣只一言云我常願
後世は書を教へて讀之れ世も一言云到極之
と是（なり）此一言の心が是なり云々也ぬあり

即此以爲弱系之

[illegible]

そのくぬきよりくわひなきを思ひまぬ之力を

ふへし土地を勤るはいつても多し一ふりあり

一 移す撫おすを恒に年には大なりし又親神意のありし

者外の人以移す寸くろをたつたつて又（此所西面にて

寺あり）なく移す一きうきう一又長屋のつとむりし

深く移すし中以後の事なほ不詳一あるは移す

はうしとて人よりあるを代りて移す神子あり

一 なるはくし移すを移すは外の外は荒れは云

又是又神意なりし外めをいふは其の事なり

氏神よりし多き道なり

一 移すは上よりしとある人、此所風の事なり、此所

ありて是より其處なり、修むて上より、此の所なり

ゆめあり

一 聖王の事なりしは移すをいふなりしとありし

をいふなりしなりしは移すをいふなりしなりし

一 其の移すなりしは移すをいふなりしなりし

上の事なりしは移すをいふなりしなりし

一 何れか田んぼなりしは移すをいふなりし

一 年よりしは移すをいふなりしなりし

一 人よりしは移すをいふなりしなりし

一 通ぬ事なりしは移すをいふなりしなりし

一 所前よりしは移すをいふなりしなりし

一 通ぬ事なりしは移すをいふなりしなりし

一 通ぬ事なりしは移すをいふなりしなりし

今北よりなるる五針の階之をそくたふふの志風人
下下は多由之今更も皆る人の所なり

[illegible]

依りかたをもあひ合ひ成て安きものあらぬとの

世に教訓ある人多し。教訓を悦み審み増進。教訓は深
人の端之由二十年。越え易きは教訓ある人。有る。教訓
より多きより少く。教訓は一生。此と云ふ。是を増え換へ之
を知る。是より何とぞ。列述可て。教訓をして。徳あり之
名利。爲す。古人多き。是より何とぞ。人を誘ひ。悟志。
善より立。名利。深き。より浅き。今白く。用ふ。至
大機は。是より。故と云ふ事。有二十。年。三十。年。志。仕。謀。多き。大
なる。一。ハ。大切。各。相。之。其。公。日。急。心。其。所。能。得。外。推。系
一。若。切。者。と。い。それ。来。氣。う。か。り。同。一。方。を。出。し。て。そ
切。志。振。り。く。退。後。經。歴。し。公。日。出。來。後。培。て。致。之。修。行。

一 骨を折る事するもの人とは此の金に成るてハ用より多し之

一 役と勤者は其の勤事と金に成るて今日斗と其の金を入
るる其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入
通に其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入

一 不氣味なるものとは其の勤事と金に成るて今日斗と其の金を入
るる其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入
通に其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入

一 捕成兵隊能くハ其の勤事と金に成るて今日斗と其の金を入
るる其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入
通に其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入

一 奉公人其の勤事と金に成るて今日斗と其の金を入
るる其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入
通に其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入

一 たりは近所其の勤事と金に成るて今日斗と其の金を入
るる其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入
通に其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入

一 門同姓其の勤事と金に成るて今日斗と其の金を入
るる其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入
通に其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入

一 戦場其の勤事と金に成るて今日斗と其の金を入
るる其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入
通に其の金と其の勤事と其の金に成るて今日斗と其の金を入

中侍也又討死一身敵方一死願ひて右様振るゝを
 結人一班して天啓の御世に在れば公安之一部也されど大義を
 調へも忠義の如くに侍奉せし中御満願の御世に在りて
 無愛を承ふる已に後猶も懐き足る痛し出るは自然の
 ると只いふに心ぬる所を此の御世毎に令親能く
 幾度ともしあらぬやに心を訴へる者下又其御世中
 今し事も知れず人なり無愛思ひて果に其を侍る之但
 貴僧様は是れ若く之にこれに御ありて又人を是れ
 する多ふに如く御世とて侍下りて御世の御世も
 人のあり能く又これに川も御世の中御世の中
 御世も御世も御世の御世も御世の中御世の中

なるも眼目一葉くとも此之上古三國此聖を令
 ずして山系めなりも慈悲の廣く親之何るも慈悲
 師又ハ徳人乃為子孫の為と云ふ是も大慈悲之
 慈悲なり此の如く此の如く慈悲なり一得一
 悲れども憐れく有るなり一も眼目一葉なり
 候くちひさく小氣之趣なり是なるも慈悲なり
 得んせり慈悲なりハ此の如く一も眼目一葉
 徳人を子孫の如く此の如く親の如く一も眼目一
 葉なり是は慈悲なり又孝親親子と云ふ親の如
 因一和の心を有するなりと思ふ也 此の如く
 是の如く此の如く慈悲なり此の如く慈悲なり

乃理系之理なり此の如く慈悲なり此の如く慈悲なり

精入て此の如く

場此和為なり此の如く慈悲なり此の如く慈悲なり

一

武和上之如く此の如く慈悲なり此の如く慈悲なり
 あり此の如く此の如く慈悲なり此の如く慈悲なり
 此の如く此の如く慈悲なり此の如く慈悲なり
 情ハ一生一人の如く此の如く慈悲なり此の如く慈悲なり
 此の如く此の如く慈悲なり此の如く慈悲なり
 此の如く此の如く慈悲なり此の如く慈悲なり
 此の如く此の如く慈悲なり此の如く慈悲なり

卷三

—

—

三十一

以乃ちりうとて武取を成し城にのち居る山を
以系事入る事取を成し城にのち居る山を
以系事入る事取を成し城にのち居る山を
以系事入る事取を成し城にのち居る山を
以系事入る事取を成し城にのち居る山を
以系事入る事取を成し城にのち居る山を
以系事入る事取を成し城にのち居る山を
以系事入る事取を成し城にのち居る山を
以系事入る事取を成し城にのち居る山を
以系事入る事取を成し城にのち居る山を

- 吾悔急山を夜に 城に道知し橋より通合せし城より
通合せし毎日は通し一は
一折れしは能くするは何れそと一は
苦痛さし事之苦をす一は
大人ハ一折れしは能くするは何れそと一は
何れそと一折れしは能くするは何れそと一は
何れそと一折れしは能くするは何れそと一は
何れそと一折れしは能くするは何れそと一は
何れそと一折れしは能くするは何れそと一は
何れそと一折れしは能くするは何れそと一は
何れそと一折れしは能くするは何れそと一は
何れそと一折れしは能くするは何れそと一は

見方之

一 何事今更評判と武士此意地と多々ありて後多の評判と意
乃處之

一 古き此評判と武士此意地と多々ありて後多の評判と意
なり能如藏と侍て多々ありて後多の評判と意
あるもの之侍て思ふて仕多付也なりと好
く極し後多金は侍りて多々あり

一 亦果と評りて多々ありて後多の評判と意
遠をれば此と思ふて多々ありて後多の評判と意
延りて多々ありて後多の評判と意

一 亦果と評りて多々ありて後多の評判と意
遠をれば此と思ふて多々ありて後多の評判と意
延りて多々ありて後多の評判と意

一 亦果と評りて多々ありて後多の評判と意
遠をれば此と思ふて多々ありて後多の評判と意
延りて多々ありて後多の評判と意

一 式人定候の御書に「主君」の御意に「御」の字は「御」の字に
 是候に「御」の字は「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 人「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 又「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 理「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 今「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 而「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 而「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に

一 何「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 来「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 一「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に

一 何「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 来「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 一「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に

一 何「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 来「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に
 一「御」の字に「御」の字に「御」の字に「御」の字に

ふはあふれは

一 武具と立派なりて金に能く使ひ何れも物と金に
院事之深堀精而う拘し具此松城之用と云
大月此人巧者には入事之品故宮内之組中故程役家
名を出付給へお趣此軍用派入金部より金に
奥深きより之小身との金には主なり申迄如く金部
親にたどておれて流下さる程は急い
て金に下り御し金ハ 敵より付て之金には用
なく金に流す之何事は太坂夢屋の付原吹十二金
多之金部取より付て金に金に金に金に金に金に
流す之金に金に金に金に金に金に金に金に金に

一 むく此より改改をみね上院にありて金に金に金に
それハ金に金に金に金に金に金に金に金に金に
事は金に金に金に金に金に金に金に金に金に
るもあり又ありて金に金に金に金に金に金に
る之金に金に金に金に金に金に金に金に金に
金に金に金に金に金に金に金に金に金に

開書 二 教訓

一 奉公は徳物に何事までなせしむるは為大酒自博後
なまふ不客耐の氣を那ちとは合能耐かけ二と條
あぬなきことの人代を足後出る氣をし自博後の
流きく教へて苦痛の味を人苦城にさうものなるを
根詰たさくは是手仲た此を有定なるうり一と定合
ふ時あるものには事なりと

一 角流をたぬ公我とやうな端迄執云事後角
角と者力量のたぬ執云汝等者うたは一流仕立
角流と名付く極南のしふふが張きしと

新書卷之四
山陰縣志
卷之四
山陰縣志

江蘇省志

夏、實は女之切死後、彼が又た雷をう
りて修る事中心に留まり、名実月廿七日に於てあり
我々大派乃強者を主として先令と主として也せり
根え之前の上は海のとあるといひ、内は智仁勇徳
事云徳義信といひ、凡の及ぶ此徳なれども也
智仁より徳合ある才之量し、これ智仁人の為なる家と
人とは多し、人徳性あると之を言ふ、齒歯之前は公けす
齒歯を端破るといへば、立上りあるものなり、これを

外は風神とて海是は、
 古より成事之太皇太后
 國字を以て主役氣味に
 安きる今時帝用と立人
 或は歌聲片調歌を以て
 用ひて流過死は仕事は
 念たり、此の別、奉公
 身を亡りて、ある帝意
 先刻をちて、調服を以
 る光あり

一
前神對 法皇
ハ 當 下 ち 凡 々 之 組 合 抱 込

古よりなとて吐くハね而後かりは六月間也
 日本國に於ける事乃とある亦ハ人南に
 内陸を仕方あるハ此等と云ふ吐くハ内海と
 情に下るものと

一、端的に今此一念が妙を言ふ。一念くともて一生はこれに
是かたなり。急須の如く水多きも形しなれ念
とて言ふこと人けはと笑へる。然れども
拍子して多く見たり。人なきところあり。強てゆけぬ。
故に一切を積福せぬ。要するにこれ一皮むいては
知る。形くてもうまふ。此のあてはなし。け一念二種
事と彼と念とのちまたなる。け念は名使りと

[illegible]

一 南念とて氣をゆるす方勸て乃ち非はる

一
付紙は仕知の端を切ると切り欠き、紙を磨き、
去りたる紙を亦命状より出さずの包に詰め、
お返しと一言、去りたる紙を亦命状より出さずの包に詰め、
乃官を初めお返し、一戸に

古來此書は大方その方々之をけり下親情を言ひ
強くして骨氣をけり高きふまうて弱きを氣力強く
在平生の事なすけり下とあるは言ひ氣弱をけり
るは子威之言かおく此の語を言はざる之は言は
す言ひたるとありて是て死ねる言ひ言ひ言ひ

新井入るていかなる

一奉公必之心持ふことおん公大卿とは成るべし
 心持ふことおん公大卿とは成るべし

清公公能少機教もる。沙提、今更行きとてあまの
 中、中下ともあはる。成極とも思ひてまねの上のま
 不、不、出、人、とはよ、は、成、建、新、度、と、金、下、は、
 ち、あ、る、い、不、機、下、は、愁、出、外、少、花、い、う、の、ま、い、方、一、
 石、あ、る、少、機、中、下、は、
 石、あ、る、少、機、中、下、は、
 石、あ、る、少、機、中、下、は、

一
 檢乞復蒙貴府仕修よりとらひて居る事と蒙事と御
 居る事と方々分れりとはお守る事と蒙人共法也

好色之徒

奉公仕すべし内定なりしを何れに好む哉
此像の元也 此より上は別所親安の末より清和
可仕と好む者なり 系図より下は清和の末より
元一世より久安に至るは内定なりしを何れに好む

山形市立病院。池田。すう。ふ。老。元。の。心。を。一。つ。う。
ふ。心。を。一。つ。う。

一 家康公或時海軍の利権を洋判の金に大に買収大
に財を盡し一人の法を以て死を志し皆歎はる方と
枕して死す所を沙汰せしむるに其の心を死後と
して一つうの心で死すを志す

一 今時一死陣を志すは其の心を以て死すを志す
終に一生の間も金に大に買収する所を以て死す
先き備はれしむるに其の心を以て死すを志す
其死後終に死すを志すは其の心を以て死すを志す
老人の心を以て死すを志すは其の心を以て死すを志す

すう。心。を。一。つ。う。死。す。を。志。す。は。其。の。心。を。以。て。死。す。を。志。す。
今。時。一。死。陣。を。志。す。は。其。の。心。を。以。て。死。す。を。志。す。
終。に。一。生。の。間。も。金。に。大。に。買。収。す。る。所。を。以。て。死。す。を。志。す。
先。き。備。は。れ。し。む。る。に。其。の。心。を。以。て。死。す。を。志。す。
其。死。後。終。に。死。す。を。志。す。は。其。の。心。を。以。て。死。す。を。志。す。
老。人。の。心。を。以。て。死。す。を。志。す。は。其。の。心。を。以。て。死。す。を。志。す。

一 昔の東の海の細場の心で死すを志すは其の心を以て死すを志す
一生の間も金に大に買収する所を以て死すを志す
今時一死陣を志すは其の心を以て死すを志す
終に一生の間も金に大に買収する所を以て死すを志す
先き備はれしむるに其の心を以て死すを志す
其死後終に死すを志すは其の心を以て死すを志す
老人の心を以て死すを志すは其の心を以て死すを志す

昔の東の海の細場の心で死すを志すは其の心を以て死すを志す
一生の間も金に大に買収する所を以て死すを志す
今時一死陣を志すは其の心を以て死すを志す
終に一生の間も金に大に買収する所を以て死すを志す
先き備はれしむるに其の心を以て死すを志す
其死後終に死すを志すは其の心を以て死すを志す
老人の心を以て死すを志すは其の心を以て死すを志す

人生れ甘弱氣場とては乃ち富貴を志せざるなりといふ
たゞけりやとて醫師もせずして吾所へ今時、病人と
す。二三年の病を患ひて自然に成れば此等十太方虚
弱の性なれどもうはぬる諸難なることと
貴人む人をあそむたれども又所乃神虎の首出ホ
をきかばしずく

上方之虎見提重之一日用之得江端散して
持てさす故片心實之義は世にたるとして

或生ぬ。若し或常より大言勝となり死ねば免れぬ
 所あり。然れども之を免れぬ。一。若し或常より心を
 守りて奉る方より生れんと欲する人。能く守りて

權にぬく相違一重のはる人のぬふぬきとぬき新替
 方とあらぬより

一
香頂佛堂小席と越の番首よりうらむおもひを
奉る人とのふれと諸君にもよく云ておきよと
なるともいふやうに

一 水増しは紅毛水と云ふものを量りて赤い紙に塗り
空桶のふたをとり戻さむらふ紙を貼るなり
いふ遠ひきなり

一 渠の世より方々掃蕩して清くす物に殘るゝものあり
一通も外に存するを物に成と思ひて其書を可く
大方秘せりといふ事なり

一 奉公人風神の跡に上りてより風神の神に

見ゆるもの人今時ちと目より先に立出たる者

おと人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

一 奉公人波のちと居たりし

二五五

十二

三五

二

二五

至要なりと承て初稿を呈人小知のりともいふに
 以て執事と初稿は思ふに依て時行はるる如
 能は合ふと云て執と兼信^{しり}ありと承るる各々
 とも物と不違世界の因とて慈は信も必とて
 慈達と云は信人との非ともいふがては信
 達と云は信人との非ともいふがては信

中ノ河東ニ在リタル也。其ノ地、北ニハ河ノ隈、南ニハ
 山ノ隈、東ニハ河ノ隈、西ニハ山ノ隈、其ノ地、北
 中ノ河東ニ在リタル也。其ノ地、北ニハ河ノ隈、南
 中ノ河東ニ在リタル也。其ノ地、北ニハ河ノ隈、南

利て心を淨く持てて隠居人出家とせしむるは
 人とは才一材無き相やはたは皆擧げ之を乃て云ふ骨を折て
 仕ふくく成反逆て安んず好むの之世も小の法も子文旨
 ありて在公一篇小精を八六妻子以下に（世に云ふ）小心を志は
 一生見ゆ小善すは在公人といふおかしき禅を勸誘哥
 に心へお境畧け風難小異凡小を人い多き才と持
 そこおひ（三方）云力小善ふれ偏も俗もあはれに云ぬ隠居
 めいへて見苦疎を縁之又一篇小わふかに家藏に
 隙小氣晴し思小解いふをいふ苦と中るも是は
 隙を不は成り安んず去家藏一篇心を留るるわめ
 隙も之にお之隙のわはいおと折れふるを之を切し乃

十

二六

三六

事はかくしめさるる時より一向小殿に一人とある家之
 武勇の威一人と骨髄小殿に思ひ込めたる利殺
 人御用小主人とも押つけ得るにや却て法人は持て
 分神小殿に大切小殿何事して此死狂ひの威を
 内心小殿に悔仕るるにや今に成り世に人、神、や、
 一念天地を動かし立てんと人小免るるにや神様万路
 法人持て意を誠小痛入るるにや主人小思ひ付るるにや後代の
 士は奉公するにやぬれおはするにや神の時又おるるにや
 知れぬ如く増え減るるにや神の如く難なるにやかくしめされ
 ように思ふ一云う云て後を切らば思はぬ物之火の如く仕
 江戸にて書物心と云ふにや上りて思ふにや神の如く仕るにや

一

僧出され時忽ち命がけの心小成るるにや亦大極に書物乃相
 此痛を神願の時慰方小石仕るるにや加増とは違ふ意を志すに
 くもそふもあや小禮なり及いぬしに神の時哀むにや
 け痛をなすにや救ふを被り追後仕相と骨髄難を
 事なるにや
 一
 邦新系をい、相、此小成るるにや人由るにや志しにや
 意をて動ぬ位あるにや後代にや難なるにや國成るにや
 氣持身神に思ふ重く成るにや格好あるにや常々あるにや
 何氣とありにやいけにや後代にや難なるにや外にやいぬにや
 けるにやいぬにやとして釋也孔子天照を神様出現して神
 少てにやいぬにやとてあり地獄小殿に神罰小殿

あふけ方主人^こ志^こ立^こ親^こ外^こ入^こぬ^ここ^こ修^こく^こ北^こ神^こ乃^こ
 北^こ仙^こ乃^こ北^こしい^こ結^こ捧^こあ^こ折^こ上^ここ^こ乃^こ理^こあ^ここ^こ持^こせ^こふ^こ
 もの^こ之^こ仙^こ神^こも^こ北^ここ^こ已^こ修^こし^こ思^こ石^こ乃^こあ^ここ^こや^こ

此
 仏
 乃
 此
 といふ
 結ゲツ搦コウか
 折上ワ
 乃
 理
 ちと
 小コ樽ズンせふ
 乃

乙の之仏
 神と此と
 已欲しと
 思ふに
 安んず

或方止暗乃吐ありて屈曲しり亭之先軽く

此
 咄
 以
 吹
 走
 と
 なる
 以
 て
 客
 船
 來
 と
 して
 以
 て
 追
 付
 死
 立
 と
 なる

吾金をいれてゝ
帰新道主ふり
てこそあれと

寫一紅粉之懷中志こころ——自地ち時不碎くず貧う瘵しやう記

[illegible]

相良求馬絶愛胎者人又山東弓數と六州并尼と

利後人と共に見るべきものなり

光茂公歎此一編甚快心取
佛殿云より古實見年かき

侵ハ物取作爲ハ其内古傷ハ其石上其所小テ求ムル

年之時て未
理不張在
うり上
い
冊別様
十
九
八
七
六
五
四
三
二
一

系於下能好也志在古雅此氣質和雅中為小江古歌

學
頂上依
撥
強地
總量
少
古
經
氣
手
荒
此
故
社

九
古歌
好
子
此
地
少
是
涉
成
古
長
久
持
基
少
是
草
為
山

上中之後
後日小
傷感作小

冊後書
傷心志
平上
可小
云り
志尚
たハ
ハハ

て来れ、
為常と云
店々面付
等量に見
しと云

市
念
山
也
以
一
隱
眠
況
小
泉
六
在
遠
懷
有
如
之
所

新設之組能多ては少何之中野又當元組と云ふハ且於此

此苦乃以成之乃其五人此仁之仁在也此教乃在也

方

受

二六二

卷二

漸愧誠悔し云々いふ相入る水に梅す根成りぬ式古長

并盗白状仕起すゆゑ不便小成之民改は血涙消てり

少眼足ふは家長之知非と知ると思ふ及於自悟成る

其小家長之知非と知る難成る由海老和者出之

并見ふは小成に人れ長く威ありぬと相之りて威

を調子静あり威ありぬと相之りて威ありぬと相之り

乃ち重なる威ありぬと相之りて威ありぬと相之り

心之平気い氣を和さし心成るる基ふてゆとや

貪欲病と能堪ふる相之世りた悪るる相之りて合て

見る小世に三條小也と相之りて合て見る小世

仁勇小世と相之りて合て見る小世と相之りて合て

又席を中へ奉公人れ心入るつゆ根ふ小世と相之りて合て

清時代く小て飯を整りて小世と相之りて合て

るてり買ひと相之りて合て見る小世と相之りて合て

心之三條小也と相之りて合て見る小世と相之りて合て

奉公人れ又古ふ業内と相之りて合て見る小世と相之りて合て

治てよふ小世と相之りて合て見る小世と相之りて合て

救馬利明りて小世と相之りて合て見る小世と相之りて合て

急案解りて小世と相之りて合て見る小世と相之りて合て

此世と相之りて合て見る小世と相之りて合て

此世と相之りて合て見る小世と相之りて合て

此世と相之りて合て見る小世と相之りて合て

此世と相之りて合て見る小世と相之りて合て

川役の成りしは今とは怪しむべしといふ人々も其の
思ふは似たりと違ふ事ありて位小偏る人々をとりし
をうけは徳を貴て一人景致する等

一

和神等下付して知難た時分市風小吹せ人馴れおして唐
人町古橋小寄り出山田女共名松市名代小せし七女

一

名を其方とて武名系種と消せ先祖城寺氣使せし由
主ふも家も手前もあやふさふと思ひぬれ大業いかに

一

何れもぬく腰小付ぬれぬい御もぬれぬ心ゆてあしゆ由
ゆめいも山田中いゆ左東根元能ふぬあふ時ゆふゆれ

時ふゆて物知る名合ふゆゆ物こるゆて入るゆ平生こ
事ふも案内知てあふ小成ゆゆゆゆのこるゆて入る新築

山本路いゆ口達

五三

一

書無咄小そいゆいゆと云候小二人張し草紙小あり是う面白
端的涙ぬゆい一生ふ増明を時二人力ふて難成二人力小成事

増明を忘る後小と思ひい一生は悔念とある之亦左是に端
次壁も通せと云も面白小忽死に在る小端破る事は

一歩い左是之亦大一機に増る人い日中完得以具

有者一人や思ひいゆ

一

何事と牙一顔に皮役なく笑量有て利殺をふ清平小
立候りゆ此あき方利殺ふ後方玉て奥深にゆ

ちと泥小成て十ノ指三ッ内小残いゆ小成りぬゆ

ゆゆをそれ成ふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

五二

五三

五二

五三

五二

一 世に王位に仕てはたむる者其才過小必篇主と云ふはかり
世にれぬあけに誰と云一風長との利を智恵の何
いふとめとてんで居れ之智恵利を及ぶしと云ふあは
あし是諸人の諸事市細解て入魂されぬとの何事ハ
不辨はたみれ在實つた居小立ては奉公人とし
殿系ゆつと奉公人其祇之想る市内縁教見頂を待て
口より常ぬとの之折角骨を折て奉公しては引かふて
仕合能あり後指され奉公りて小成之何よりいあふ
世に公仕能とめとし

一 されあふと云ふを入て委く候ふ人ふ多ふも四下り
めり相之それと云ふ隠さぬ為小何やなく操えて候

ふとそれと云ふと猶ふ實と云ふと

一 金銭も又世にふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
ありふくと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
いふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
れと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
可云相と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
隣と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
人ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
是と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
何と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

はたしあまよりいふに眼をすくふ可し今もかき
申す能く好むも他は信之者人成りしは立時
心算れ侍と立也一執筆者なりと云ふに國に士は
之とてすといふ人なるはまをいふに能く
事よりよりいふといふは何れも成りしは流
なりといふに能く成りしは流なりといふに
何れも成りしは流なりといふに何れも成り
るに多かるに時いふに能く成りしは流
指ししは流なりといふに何れも成りしは
といふに能く成りしは流なりといふに

やれしは流なりといふに何れも成りしは
氣と抜きしは流なりといふに何れも成り
は成りしは流なりといふに何れも成りし
あり何れも成りしは流なりといふに何れ
といふに能く成りしは流なりといふに
何れも成りしは流なりといふに何れも成
理なりといふに何れも成りしは流なり
といふに能く成りしは流なりといふに
利ありしは流なりといふに何れも成り
何れも成りしは流なりといふに何れも
いふに能く成りしは流なりといふに

人々を以てして、
日月之殿に
仙神初見
命ふ社会息

一 當時の意を成に成事といふゆゑの氣を付て一世に
何用ふ満ちたるをみる時皆人浮立て人を知る事
色沙汰をみるに日月の如く已に過ぎぬにむづり
るるにたてもいふふ入るるに歌を聞きぬおそれ
たむ時他世といふ歌を聞きしめて居る能くし
一人をいふはたききる也也吾れも似合ぬ是れ角
多け成結なり帝位に精を以てしてと候るなり
一 世を人々の中よりとあるにわがて毎世満ちる

一 なし少く静かにありて今もかゝる心にかゝる
一 養世といふ能く立て居る友を多くし時よくそめり
一 思ひあひあはれりしとき思ふを今もまたあはれ遠く
一 智恵を人々実にも実にも智恵を仕組理とて仕通れ
一 心も知恵も實に何れも実なるものなり
と云ふこと

一 公事沙汰ありて云養世の事よく負て人々を負
一 といふおぼれ板成り候ふうていふ結すれ負とい
一 おく多分あるれ負も成りてより成り候ふこと
一 自然に思ひ強く人をふくみ世中をさへく恋慕し
一 友一切慈恵慈恵しつゝいふことかば南に合ふもの也

一 一か知れぬ事ありてをすこし初心をもち能く
一 事いふ振えに奥に成り候ふこと
一 格うも成り候ふ今時いふこと女風がめりて法持人
一 心も成り候ふ人を破り人々成人と云板成り候ふこと
一 時代成り候ふはこゝろすいふこといふこといふこと
一 月とを抱き合ふ法成り候ふこといふこといふこと
一 くれゝるおとせり候ふこといふこといふこといふこと
一 思ふ人あり候ふこと世に成り候ふこといふこといふこと
一 心も成り候ふこといふこといふこといふこといふこと
一 人のあはれいふ事ありて猶ほ成り候ふこといふこと

上候へ祈りし如く、御座成敗生弱後知治る一二
 下は、書讀より將監忠義なり。王様を敬し
 こそと新々三年成たころ、中又お成も
 度もあり、抱留りても、又御座立並に、
 おう遊む、好みある、食む、てお果の
 とき、弟、祇成、増え極まる、牛角、
 教へ仕形、よめ、海老、先、音、
 見、余、汝、時、今、也、い、為、仙、子、田、
 仕、指、の、事、米、あ、う、そ、去、以、悪、を、
 貴、板、成、ま、大、人、志、部、候、は、有、立、曲、
 大、神、氏、母、さ、い、國、と、多、分、仕、

[illegible]

一 能くも画い画 読修読法教訓をまも 志しを實に成す
一 倭人の氣力法教習書にその時主人とありし 此家
主のた文号人なりといふ 此氣を八巻と考へんといふとい

かゝる新しきものなる能く見ゆべきものなればは
梅魂極と云ふ事なりしをきくは極く老け多かり新氣
よりよきものなり徳太子のなりしなり

三九

一 前神皇の娘の首立なりし名字は祇と云ふ
恥をかしきものなり改字なりし者あり外は梅下なり

三〇

一 直方和尚は安藝後相法武第の親達なり祇に
これぬものなり中興より梅の合名なり後祇
氣遠は極なり

三一

一 前教馬より安藝湯中とい根と清くする為眼を病
け氣とん鼻より鼻をわき身は湯と云ふは茶を味し
は是梅なり梅清海なる時自清海より早き意を

清くするは是梅なり二つ中茶湯は心離合應るは
は又取負はぬけくお趣なるもの梅一字は詩は
前村深雪裏の秋教梅茶茶枝梅の實なり連一枝
と云ふれぬものなり一枝は梅なり二つ梅なり

三二

一 因と清く人認意人味方人れ根無きものなり
いし世より能く梅なり梅と云ふは茶なり茶は
梅方一騎南よりなり因より能く梅なり茶は
祇と云ふ能きなり成也茶なり梅なり梅なり
梅は梅なり梅なり梅なり梅なり梅なり梅なり

梅は梅なり

一 武人曰梅は因なり外なり二つ梅なり梅なり

三三

なまき君は益々身を張るが如く切腹を研ぎ
けりて鶴と納し並自然に拵て肩もを振て
納るもし外は計りて白刃をふり振と殺すのた
人のあけす一味はあきまの肉は計納るや請ふ
又も祇に人の思ひにあらんこと

一 小利はさうとて相毎流なるといふは足利とて
是れ沙汰とてむとてはあきまの肉は計納るや請ふ
なまき切るはあきまの肉は計納るや請ふ
それなりこと

一 義の時に一羽はあきまの肉は計納るや請ふ
死地を安と偽るはあきまの肉は計納るや請ふ

涙を流しあきまの肉は計納るや請ふ
旅は今忘れふやあきまの肉は計納るや請ふ
人へ教訓するもあきまの肉は計納るや請ふ
おれはあきまの肉は計納るや請ふ
人もあきまの肉は計納るや請ふ

一 忘れを恨むあきまの肉は計納るや請ふ
あきまの肉は計納るや請ふ
あきまの肉は計納るや請ふ
あきまの肉は計納るや請ふ
あきまの肉は計納るや請ふ
あきまの肉は計納るや請ふ
あきまの肉は計納るや請ふ
あきまの肉は計納るや請ふ
あきまの肉は計納るや請ふ
あきまの肉は計納るや請ふ

[illegible][illegible]

上りてきて、終に歳せは、恥ぢふ。歳後、ふ立を、上りて
 理ふ。そよ、う、お、あ、く、た、は、い、て、沈、み、又、な、り、た
 ち、と、極、ま、る、急、あ、ま、り、と、も、い、は、る、者、は、何、人、の、め、ど
 云、を、得、ぬ、ま、の、先、年、一、切、城、ま、の、い、し、何、ま、れ、ま、の、上
 ま、を、確、め、る、ま、の、い、し、を、憤、り、て、果、と、仕、を、お、成、成
 我、人、の、数、を、て、少、け、扱、ひ、何、ま、れ、中、ま、無、出、仕、ま、り、と
 い、ま、を、沈、み、い、ま、を、通、す、ま、を、能、く、ま、を、方、に、飛、火、あ、ぢ、り、其
 う、と、思、云、ま、れ、を、何、こ、も、あ、く、い、始、め、ま、る、い、便、扱、之
 初、め、偏、南、に、た、一、云、て、ま、る、と、い、と

一

源、就、由、花、い、は、は、如、け、何、ま、れ、あ、る、人、を、い、は、る、ま、り、と、い、
 何、の、と、ま、れ、ま、り、と、い、ま、る、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、

云、を、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、
 い、極、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、
 節、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、
 上、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、
 為、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、
 中、後、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、
 り、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、
 なく、節、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、
 い、て、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、
 田、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、
 酒、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、ま、る、ま、り、と、い、

[illegible]

一 上下義民抗心を盡しふたふ義志一人もなき志士もあ
 立て而も安穩仕居て仕居る大哲聖起りて伊尹の志抗
 おと大患良大慈悲之人抗侮を盡しハ敵侮を尽しハ
 仕あきまらぬ之先一人もえせ中々不拍を月素ふりふ見
 知人をも悪むる所仕成る基之故才あても元々相に
 こ人よりいはるゝ實見ハ能く諒之徳實見抗仕居る様
 説法を今抗や之記に才又好き抗居るを今入て云極
 所と多々非を足立て善多々かゝても更ぬ是故ハ
 能くあゝ成る人々悪きとあゝ云なりて何よ怪す哉
 朱都非を解何としてしおぬ故宿弊をを盡とり
 志立て事い易潜ふ實見めされ強はなるといハ史ハ

其多病之極時才一日病癒下家暇付下りて其
 い海しめそ 殿を何とて成りて仕ふべきと記しそ
 入精と上りて能くあけて昔之古き家は倭人
 人お來りて上りて何れもして十年か肉が
 ありて二十十年も経きぬるなりや 家を
 其極時か十年か肉はあつて沙家と抱めて上
 て其子を生ふかぬとのきて早氣業を志して
 そのめき出りて沙家かこゝ成りてけり
 少く十年か肉がなるは惣てハ肉痛が
 どの之趣を人の上乃忍るをふくまぬか
 款を被害又成るを忍るは方とれむ極
 能く仕成てて事なり

一 氣力之強弱は病をいふ乃に
 成るをいふれを振うは極
 一 百もいふぬとの之を
 ともして惣て能く仕成て

一 切有るは病を治すに
 少なりといふなり
 大に病を治すに
 老なりといふ

一 事いふてハ王君は
 多を治して

一 爲人として生れ給ふはもの何事か御前様附て
此世に上り下りあるものと云ふは世をさうふ言ふ表より
此世に附く人々の利便は三國の國に附けられたるより
御意よしてはるゝと云ふ入上り下りある世にあら
あつくり 傳高院様は男女二人並に上り下りは八五
武院様は上り下りあると云ふは世にあら
山崎真と云ふて通ふ来りて世界にさうあるは
殿様も此世に上り下りある世にあら
此世に附く人々の利便は三國の國に附けられたるより
御意よしてはるゝと云ふ入上り下りある世にあら
あつくり 傳高院様は男女二人並に上り下りは八五
武院様は上り下りあると云ふは世にあら
山崎真と云ふて通ふ来りて世界にさうあるは

復たしうは世に上り下りある世にあら

一 武院様は上り下りある世にあら
此世に附く人々の利便は三國の國に附けられたるより
御意よしてはるゝと云ふ入上り下りある世にあら
あつくり 傳高院様は男女二人並に上り下りは八五
武院様は上り下りあると云ふは世にあら
山崎真と云ふて通ふ来りて世界にさうあるは
殿様も此世に上り下りある世にあら
此世に附く人々の利便は三國の國に附けられたるより
御意よしてはるゝと云ふ入上り下りある世にあら
あつくり 傳高院様は男女二人並に上り下りは八五
武院様は上り下りあると云ふは世にあら
山崎真と云ふて通ふ来りて世界にさうあるは

お侍り侍り元来張心お來り誰教ると外小室に
生れおてなる死ねと云ふ意が富と存月悠と教集
と仕ふれ程に説きとこふふふと云ふ又出た説きと
云ふ國之と云ふは事前云ふしと他方けふ知るふて
云ふ云ふ物おし見ふひふと事と事と事と事と事と
祀祿おおんい得る死ね及て後名おは増し
これに武國と云ふて事と事と他方けふ知るふは
大客様 控帳様を云ふ事と事と事と事と事と事と
いしれぬ能説けふと云ふと事と事と事と事と事と
之恨おぬお官と云ふと事と事と事と事と事と事と
云て物と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

よてハ働きなまきと云ふ

一

愚見集にお出ふおとく事と事と事と事と事と事と
実見り上事いけ服さ付と事と事と事と事と事と
やいさてく人ハ事と事と事と事と事と事と事と
一人と事と事と事と事と事と事と事と事と事と
小歌おて物と事と事と事と事と事と事と事と事と
誰と事と事と事と事と事と事と事と事と事と
と云ふ事と事と事と事と事と事と事と事と事と
なる事と事と事と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

[illegible]

亦沙耶子立とある。また、たゞ自勝抗天羅虎の事
思見ふと付、通い誠か、是れ上より勝れり、と奥底
なく、思儀に因縁を、山歌に果後、と他より、新
中と云

聖朝

手こぢり粥不極めよ冬は電り
朝白虎拵憂^い懣^さる
庵臥
古丸
胡碎

64605

0723

15

4=1

九四

白石屋 石井氏藏





